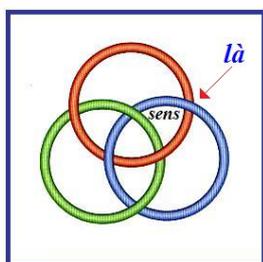


Le sinthome

1976年2月17日

冒頭ラカンは、リール街の分析のほうはアナリザンが冬のヴァカンスでスキーにでも出かけたのか閑散としているのに、こちらセミネールは満員御礼と言っている状況で、例によってもっと聴講者が少なくなってくればいいのに、と不満を言い、できたらこの講堂の半分の広さぐらいの部屋でやりたい。そうすれば、自分は部屋を回りながら *faire en rond*、個々の聴講者に質問したり、あるいは本音としては、スーリーやトメに結び目のことで助けて欲しいのであろうか…ここでも地口が入っている。recherche(研究のためには大人数はふさわしくないからこの語を使ったのであろうが)は chercher に結びつく、chercher は俗ラテン語 *circure* から派生したものであり、その語義は *faire tour de* で、まさに「回る」である。「探す」の意味では chercher は *querir* という語(ワロン語、ロレーヌ地方の方言としてのみ現用)を駆逐して使われるようになったとのことである。導入部を締めるにあたってラカンは、自分はピカソのように天才ではないから「わたしは探さない、いたるところに(題材は)見つけることができるから」*«je ne cherche pas, je trouve»*とはならない、と謙虚のゆかしさを表す。

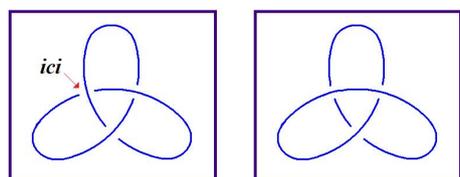
本題に入ってまずラカンは三つ葉の結び目を描く。ボロメオの輪は意味としてボロメオの結び目と言われ、その意味 *sens* は、ボロメオの輪の以下の箇所に現れてくるが、本来はボロメオの絡み目(ラカン自身、そして多くのラカニアンは *chaîne borroméenne* と呼ぶ)なのであることを理る。



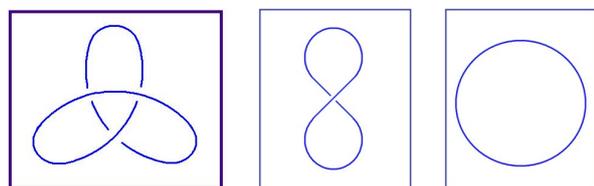
sens は想像的なものの輪と象徴的なものの輪のあいだにできる弓形 *lunule* の部分というが、R.S.I.でもそうであるし、Erik Porge の論文からしても、それぞれの輪を現実的なもの、象徴的なもの、想像的なものと区別することに躊躇いがあるのであろう、ここでは *sens* だけが表示されている。その上で、ヴェルツブルグ学派(cf. https://en.wikipedia.org/wiki/Oswald_Külpe 参照のこと)とは違うのだから、言葉抜きにしてこれを「思い描く」*l'imaginer* だけである、と言う。ともかくも、以前は *les ronds*

de ficelle de l'Imaginaire et du Réel et du Symbolique と呼んだが、ここではこの構造に含まれる結び目を問題にしている。後出の「等価性」の問題も見据えてのことである。

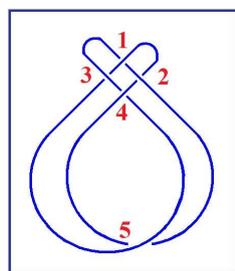
三つ葉結び目の話に戻り、交差部分で「誤り」*erreur* が生じたらどうなるか。下図の左側の図が正しい三つ葉結び目であるが、その *ici* の部分に誤りが生じて上下が逆になったものが右側の図である



これはライデマイスター移動により八の字型に、さらに自明な結び目つまり円形になる。

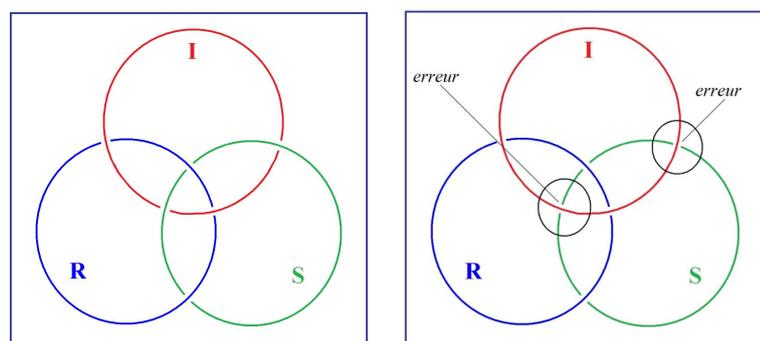


四つの結び目をもつものは Listing の結び目(4₁)とよばれているが、三つの結び目(3₁)と同様種類しかないが、五つの結び目をもつものは2種類あり、このうち 5₂をラカン勝手にラカンの結び目と呼ぶ。

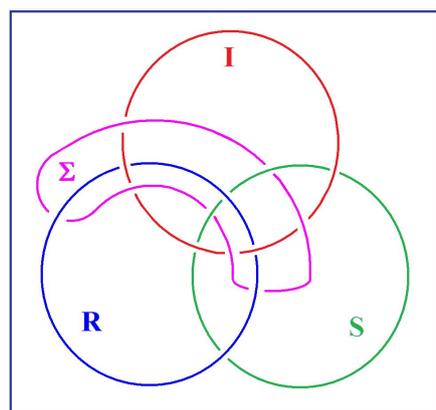


この結び目の特徴は、4 か 5 の交差で誤りが生じると三つ葉結び目となるが、1,2,3 の交差のどれかで誤りが生じると、三つ葉結び目の誤りと同様、自明の結び目つまり結び目 0 になってしまう。

症状 *symptôme* そしてこの年のタイトルである *sinthome* はボロメオの輪においては下図のように正しいボロメオの輪である左側の図の2箇所で誤りが生じたもの(右側の図)が土台にある。



右側の図は輪が下から S,R,I が重なっているだけであり、それぞれの輪はばらばらになる。これにもうひとつ輪を付け足し四つ輪の絡み目を作ることができ、この輪を *le sinthome* $[\Sigma]$ とラカンと呼ぶ(ここで初めてこのセミナーにおいて *le sinthome* の輪が出てくる。R.S.I.で出てきた四つ輪のボロメオの輪とこの *le sinthome* の四つ輪は異なったものである。 Σ は S の下にあり、R の下、I の上に位置し、R,S,I, Σ のあいだに等価性はない。再度 Erik Porge の *L'erre de la métaphore* について小生が認めた「別稿、その2」を読んで確認していただきたい)。



sinthome を定義するならば、三つ輪の結び目ができないようにしながら、一方で三つの結び目ができるようにしたもの、つまり三つの結び目ができているように配置されたもの、としてよいでしょう(…)ジョイスが症状をもっていたこと、そしてこの症状は第一に、ジョイスはまさにそう言っていますが、かれの父親が欠如していたということ、完全に欠如していたということから来ているのです。わたしは名前、固有名というものを中心に据

えて言うのです。わたしが考えたのは…みなさんもそのように考えてください…ジョイスが、自分自身がある名前であることを望んで、この父親の欠如を代償したのだと。(…)明らかにジョイスの芸術は極めて特殊ですが、*sinthome* という語はかれに叶ったものなのです。

ついでラカンはこのセミナー(水曜日に、当時パンテオンで行われていた)に先立ち前週の金曜日サンタンヌ病院での臨床報告において取りあげた«*paroles imposées*»^{注)}の症例とジョイスの娘ルシア(https://en.wikipedia.org/wiki/Lucia_Joyce 参照のこと)とを重ね合わせて論じてゆく。

^{注)} この症例については、Marcel Czermak が自著 *Patronymies (ères)* において一章を割いて報告している。Czermak は当時、サンタンヌ病院の CHS(Centre Hospitalier Spécialisé)のセンター長をしていた Georges Daumezon の指導の下でこの症例を診ていたのであるが、Daumezon という人は、精神分析に懐疑的で、Czermak がかれに指導を仰ごうとしても、「この症例は転移の犠牲者である。君はラカニアンであろう。ということは患者はそのことで発病したのだ。いうならばラカンの精神病と診断できよう」とルサンチマンの塊でそう言ったのか、ともかくもけんもほろろで、苦肉の策として Czermak はラカンと直談判に及んだところ、ラカンは「ラカンの精神病！結構ではないか。フロイト的精神病と呼ばれる症例だつてあることだし…」と言いながらも、ともかくも金曜日の症例報告に繋がったのである。Czermak の *Patronymies* の一章は *L'homme aux paroles imposées* と題されている(pp.262-302)。精神医学について、あるいは精神分析についてかなり精通した精神病患者の症例の報告として臨床的にも興味深いものである。機会があればとり挙げたいと思う。因みにこの *paroles imposées* ないし *phrase imposée* さらには *paroles parasites ou émergentes* とはラカンも言っていないが、この患者の造語なのである。日本語訳として、*paroles imposées* は伝統的精神医学用語では思考吹入 *Gedankeneingebung*, 仏訳 *insertion de pensée* に近いが、*parole* という言語に関するの問題がこの用語には窺うことができないし *imposé* は「(義務として)課される」という語義があり、単なる吹入ではない。またこの患者はテレパシー能力も持っていると自認しており、自分のテレパシーの定義として「思考の伝搬(*transmission de pensée* であるから伝播よ

り伝搬に近いであり、考えることすべてが多くの人たちに知れてしまう Tout ce que je pese est entendu par des centaines de personnes, わたしは発信者 émetteur で何人かは受信者 récepteurs だとしている」と述べている。これからするとかれのテレパシーは思考伝播 Gedankenausbreitung, pensée divulguée に近い。その他にも多彩な臨床症状が患者自身の説明で明らかにされるが、ここではその細部には言及しない。

ラカンはこの«paroles imposées»をも sinthome だとしている。paroles imposées の図式はラカンの図式であるとし、いわゆる正常者にはなぜこの paroles imposées を感じ取ることができないのか、さらになぜことばは寄生物であることを、なぜプリント加工であることを、なぜ癌とおなじで人間を侵してゆくことを感知できないのか。またなぜ感じるができる人がいるのかと自問する。

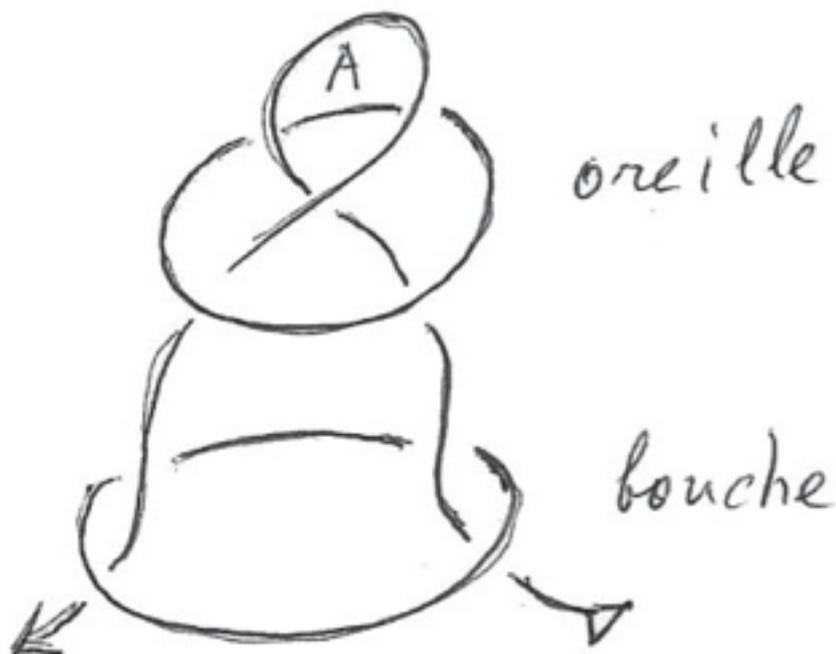
ジョイスはほんの少しこのことを見抜いていた。ルシアは単なるエピソードだけで終わる人物ではない。かの女は存命中である(1976年において、【1982年没】)。英国の精神病院に入院中で精神分裂病と診断されている。

再び«paroles imposées»の患者のはなしに戻るが、すでに小生が注で述べたことと重なる部分が多いので省略する。ラカンはここでかれのテレパシーについて、みんなには知らされる être averti のだがかれ自身には知らされないとし、つまりそれはかれ自身が心の内密の世界における沈黙であり、これは paroles imposées の枠外におけるものだからである、と言う。

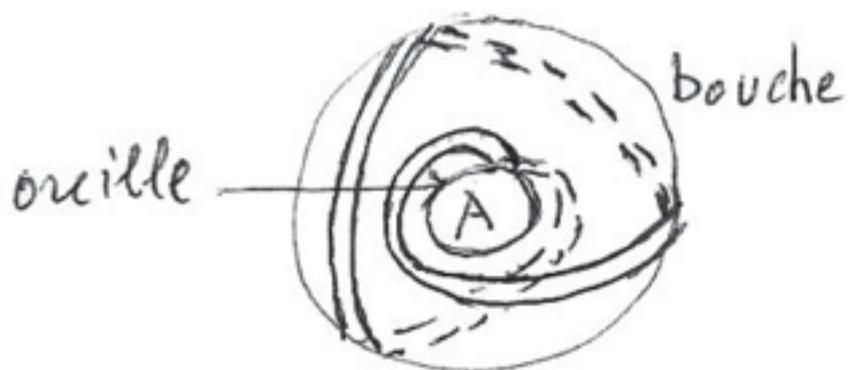
paroles imposées としてかれは「卑劣な政治的暗殺」といったことばが聞こえてくるが、ラカン曰く「そこにはシニフィアンがシニフィアンそのものに、両義的なものに、声の捻れに還元される」。この「卑劣な政治的暗殺」に対してその答えとして、かれは自分に言い聞かせるのだが、その際「しかし」«mais»が挿入される。「«mais, …»はかれの主体としての内省であり、それは paroles imposées の付け足しとしての内省なのであるが、これが周囲に遍く知られることとなる。曰くかれはテレパシーの発信者なのだ、となる。

Paroles imposées - Bibiana Morales(PSYCHANLYSE 25, 2012/3, PP.19-26)の一部を引用する。既に説明済みの部分と重複する箇所があるが、中略なしで載せる(青色)。

祈願の欲動 *pulsion invocante* の特性に基づき特別なグラフを必要とする。
矢印は主体に戻ってくるのであるが、〈他者〉のレベルのところでは捻れが生じ、
ここから「主体は自己のメッセージを逆転されたかたちで受け取る」。



トーラスで示すとふたつの孔を巡って以下のように示される。



あるいはクラインの壺を一巡する経路でも示すことができる。



(小生のコメント)主体の内部から発することばと声(とはいえ、ラカンによれば、言語はlalangueとして主体 [の身体] に寄生するものであるわけであるから、そもそも主体は自らのことば - ラカンは寄生しているのはlangageと言ったりparoleと言ったりしている - など存在しないことになる。言語は本源的に<他者>のものであり<他者>から主体は言語を借りてくるのである - 声は<他者>に向かい、逆転したかたちで<他者>から主体に戻って来る。これはいわゆる幻聴の図式であるが、ラカンの後期の理論からすれば、いわゆる正常者においても同様なのである。正常者は自ら自らのことばを発すると思いついでいるのであるのだが、病者にはこの思い込みがないのである。クラシカルなラカンであれば、このような病理を<父親-の名>の排除によるものと説明されたであろう。Erik Porgeの……Le sinthomeにおいてはジョイスのsinthomeはある父親であり、これがバラバラであるR, S, Iをバラバラのまま、つまりポロメオの輪の構造が成り立たないままに纏めることができたのである。幻聴になる以前、あるいは幻聴が弱まってくる段階で思考化声Gedankenlautwerdenと呼ばれる現象が認められる。精神医学の伝統的な解釈からすると、思考化声は思考の自己所属感がある分、病的な度合いは軽度であるとされることが多いが、思考という曖昧なものに関して言語がどのように関与しているのかという問題意識が希薄であるといわざるを得ない。parole imposéeは幻聴なのか妄想なのかという問いも見当違いな問いである。妄想は思考における誤謬、幻聴は幻覚の一種で知覚領域に関わる精神症状とする謬見は既にJürg ZuttがBlick und Stimmeによって述べてられているように、仮に幻聴を聴覚領域に関わる病的体験なのだとしたら、幻聴と呼ばれる現象の「…がわたしのことを噂している」、「…がわたしのことを中傷している」という病者の表現様式の図式をもし視覚領域に関わる病的体験に当てはめれば、「…が見える」という幻視なのではなく「…がわたしを見張っている」という表現形式になるわけであり、これは注察妄想Beobachtungswahn, délire d'observationといえる。ラカンがZuttについて触れて

いる箇所をついぞ見かけないし、聞き及んでもいないが、pulsion scopiqueと pulsion invocanteとの関連でZuttを引用しているものはラカニアンか否かを問わず検索エンジンで調べても皆無である。

les phrases imposéesは、「しかし」«mais»に続く phrase réflexive つまり患者自身が自己所属感をもっているフレーズが伴ってくる。ここでMoralesはこのphrase réflexiveをphrases imposéesを代償するものとしている。確かに患者は「わたしは paroles imposéesに関して代償しようとする傾向があります…paroles imposéesを埋め合わせようとします」と述べている。

ラカンによれば、「mais」とは例外を示す語であり«Tout mais pas ça」となる。

«mais pas ça» はsinthomeの第一の定義であるとセミナーで語っている。

«mais» により患者はこのことばの拘束impositionから抜け出そうとし、主体の場所を取り戻そうとする。かれはこのどこから来たわけでもない、かれに寄生するメッセージに意味を与えようとする。ラカンの質問に応じかれはparole imposéeの一例を示す。「卑劣な政治的暗殺」«sale assassinat politique」ということばである。患者のラカンへの説明では、これは「ことばの収縮」«contraction des mots»であり、殺人«assassinat»と扶助«assistanat»とのあいだで起きていることになる。ラカンはこのシニフィアンの横切り、assistanatとassassinatとのあいだの「音の混乱」に関心を寄せる。というのも後者assassinatは患者の死を暗示しているからである。このsale assassinat politiqueというフレーズは患者の自分の考えからは及びもつかないところに止まっている。ラカンはセミナーにおいては(この患者の症例報告はセミナーの5日前の1976年2月12日、サンタンヌ病院で行われている)次のように言うこととなる。「シニフィアンはそのシニフィアンそのものに還元され、両義的なものへ、声の捻れへと向かう」と。

ジョイスは娘ルシアをテレパシー能力のある者として、いわゆる病的体験の存在を主張する精神科医からの入院治療の必要性等の提案を退け、頑なにかの女を擁護し続けた。小生はルシアのテレパシーと homme aux paroles imposées のテレパシーとの異同については知らない。ルシアの臨床記述に触れたことがないからである。しかし、両者の訴えは逆であったのではないか。後者は発信者としてのテレパシー能力者であることに悩み続け、自殺企図まで考えるようになったのだが、ジョイスの態度からして、ルシアは受信者としてのテレパシー能力と看做せるものをかれは賛美するまでになっていたのではないか。

ラカンが、ジョイスはかの女がもっているものは自分の症状の延長部分にあると見ていた、と述べる。ラカンの症例にある自らに対する *imposé* という表現はジョイス自身にもあてはまるとしている。ジョイスにおいてはかれの作品において、初期の書評から「芸術家の肖像」、そして「ユリシーズ」、最後に「フィネガンズ・ウェイク」まで、ことばは書かれることにより漸進的に粉碎され、分解され、一方でますますジョイスにおいて課されて *imposé* いった。フィリップ・ソレールが微妙くもいつているように、「言語そのものが解消されて」いったのであるが、*imposer* されるのは言語そのものであり、粉碎、分解は言語の音の同一性がもはや保たれないようにまでである。おそらく「内省」はエクリチュールの次元にあるものであろう。つまりエクリチュールを介して、ことばは分解されるように課されているということだ。このように課されることにより、つまり変形を蒙ることにより、その結果はどうなるのか曖昧である。あるいは、ことばは寄生物としては解放されるのか、あるいはその逆に、ことばの音素的な諸特性により、ことばの多声部的効果 *poliphonie* 注)によりなにがしかが氾濫することになるのか。

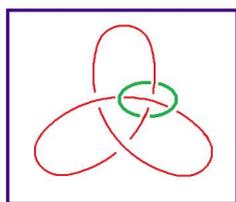
注) *L'instance de la lettre dans l'inconscient* (in «Écrits», P.503)ではこう書かれている。

線性を F. ドゥ・ソシュールはディスクールの連鎖を構成するものであり、単声の発声において、また水平軸でこの線性をエクリチュールとしたときには説明上都合の良いものである。たしかにこの線性と言う概念は必要なものであるがそれで十分とはいえない。たしかにディスクールの連鎖において、時間軸に準じて進む場合もそうだし、また (フランス語では) **【Pierre bat Paul】**「ピエールがポールを殴る」の発語の時間軸を逆にすれば、それぞれのことばも逆になってしまうが、同系統の諸言語の場合も語順による意味の効果を考慮するかぎりにおいては、この線性は不可欠なものである。

しかし詩の構造というものに忠実になりさえすれば、F. ドゥ・ソシュールの場合(「言語学言論」のソシュールではなく「アナグラム研究」におけるソシュールの場合である)、詩には多声部の音 *poliphonie* が聞こえてくるし、あらゆるディスクールは楽譜上の複数の譜表が歩調を合わせて進行しているのを認めることができる。

三つ葉結び目においてジョイスを示すとなると、下図のように赤色の紐の「誤り」

のある交差部分に緑色の紐の円環がこれを修復する形で繋ぎ止めが成り立っている。



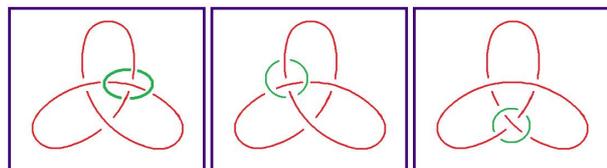
この「誤り」は父親の欠如をしめすものであり、緑色の紐の円環は le sinthome であり、この(偽りの)結び目を支えている。

ラプシュスはあきらかに無意識の概念を支えるもののひとつである。機知も同様である。機知がラプシュルの結果生じてくることはたしかである。フロイトもそう述べており、このラプシュス→機知の短絡路の儉約が快樂と満足をもたらすのである。

(小生のコメント)フランス語は曖昧である。Tout ce qui n'est pas claire n'est pas français とリヴァロル伯爵は言っているが…「誤り」はラプシュスにはなしが及ぶとなると rater という動詞から「無意識は ratés(という分詞形の実自詞化)の塊であり」、となり、「…ここで faute(語義が豊富であり如何様にも訳せるが、ラカンは L'Éthique de la psychanalyse でエスナールの l'univers morbide de la faute から話を展開させ、この L'Éthique de la psychanalyse をそれ以前のセミナーとは一線を画したものにまで引き上げるのであるが、ここでは立ち入らない。)の概念が刷新されているならば、この faute は - la conscience はこの faute を péché(道徳的罪と訳せるが、この語も【過ち、欠点】という語義がある)と読む - はラプシュスの次元にあるのでしょうか」とそして「語の曖昧さはそう考えることや一方の意味から別の意味へと転嫁することをゆるしてしまう」と続く。ラカンはときに la conscience を le conscient の意味で使うかその両方の意味の曖昧さを込めているとしか考えようがない使い方をする。das Unbewußte, das Vorbewußte, das Bewußte の定訳は l'inconscient, le préconscient, le conscient であるが、日本語の「意識」という語も曖昧ではある。

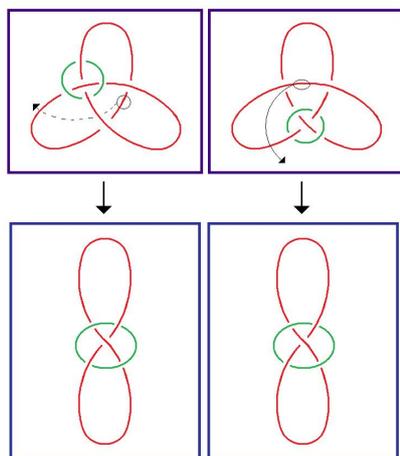
三つ葉結び目において、「誤り」がある赤色の紐の交差部分で緑色の紐の円環がこ

の「誤り」を繋ぎ止め、つまり le sinthome のケースと緑色の紐の円環が「誤り」の箇所以外の交差部分を繋ぎ止めた場合では結果が異なる。

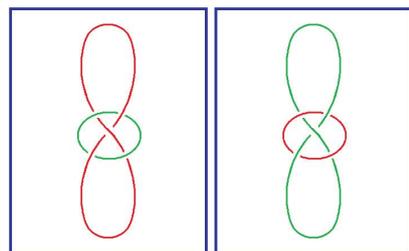


一番左が le sinthome であり、他のふたつは八の字プラス繋ぎ止めの円環となる。le sinthome はラプシュスないし la faute が生じたこの同じ場所でこれを補償し réparer。三つ葉結び目と同様の結び目を得ることができる。修正された後には結び目は右巻き dextrogyrie のようになる。

le sinthome とは別の交差部分での繋ぎ止めの場合はこれとは異なってくる。



le sinthome の場合は赤色の紐と緑色の紐とは等価性 l'équivalence をもたない。一方他のふたつのケースでは赤の輪と緑の輪はまったく等価である。



色が逆になったものの双方とも右巻きである。

等価性が完全に成り立つとき、性的関係は成り立たない。

(小生のコメント)当たり前のことであるが、性的関係とは他との性的な関係である。主体は他とのあいだに等価性をもつことはできない。シャルル・メルマンは *Les paranoïas* において、ラカニアンは *homosexuel* という言葉を使わないと書いている。男性同士であれ女性同士であれ性的関係は存在しようが存在しないであろうが、他との性的関係なのである。

三つ葉結び目の「誤り」(今度は *ratage*)の *le sinthome* ではこの *ratage* が赤と緑とのあいだ、つまりふたつの性のあいだで等価性をもつ、と逆説的なことをラカンはいう。この「誤り」が同じ箇所において補償される *réparée*。ただしふたつの性そのものは等価性をもたない。

これとは異なり、下図のような内側に八の字をもつ赤色の紐が緑色の紐の円環で繋ぎ止められている絡み目(この *Staferla* の左図は赤色の紐と緑色の紐の交差部分でどちらが上でどちらが下か判然としない。特に小生は赤緑色弱をもっているのでまったくお手上げである。Miller 版 p.99 をご覧いただきたい)を連続変形していった(右図)も、赤色と緑色は同じ形にはならない。つまり両者は等価性をもたないことになる。つまりこれも *le sinthome* の図ということになる。*le sinthome* があるところ、性的等価性はできない、つまり関係は存在することになる。ラカンはこうして男性にとって女性 *une femme* は *un sinthome* であると言う。逆に女性 *une femme* にとって男性 *l'homme* は *un sinthome* 以上に酷い悩みの種であり、*un ravage même* だと。等価性のないところ人は否応なく *le sinthome* の形態をとらざるを得ない

結びとして、少し地口が入っている。ベッド *le lit* は 性との関係とは別に病院のベッドでもある。*clinique*(形容詞としてフランス語ではラテン語 *clanicus* からの借用である。当時【1586】のこの語の実詞は *clinice* で病床にある患者のそばで医療行為をすること、であるから日本語の臨床とは名訳であると思う)を遡ると、古典ギリシャ語 *klinikos* でこれは「床に関する」の語義がありこれが男性形で実詞となったものが「病床にある患者を診る医師」であり、女性形 *kliniké* は「患者の枕元での医療行為」、さらに *klinikos* は *kliné* から派生したもので、*kliné* はベッドのことである。一方 *lit* はラテン語 *lectus* 「眠るためのベッド」の意。英語の *bed* の語源の方が面白い。インド・

ヨーロッパ語(なるものがあるわけではないが、どこかの時点で)bhedh という語があり、これは to dig の語義があったと。つまり「寝ぐらのために掘った穴」が原義として想定されている。lit に戻ると、当然、性的な意味合い、婚姻との関係、大局的に病気、死に関連した表現に結びついている。例えば、lit nuptial, enfant du premier lit ; lit de douleur, lit de mort

ラカンはこの lit と rapport sexuel の rapport について Ce rapport se lie と同音の lie を結びつける。精神分析では divan 寝椅子を用いるが、この語源はイタリア語 divano さらにトルコ語 divān、ペルシャ語 dīvān で行政を意味する。もともとはサラセン帝国における高級官僚の席を意味するものであった。そこから政治、行政に関するいろいろな提喩が生まれた。例えば Divânsâlari はビューロクラシーを意味する。

divan の上でのなしはだらだら続くがついには lien が生ずる、それは le sinthome との親密な絆 lien であり、そこから現実的なものとどう対処してゆけばよいかというモンダイが持ちあがる。現実的なものとは無意識のそれである。(Divan も lit だとして、lit はさらに性、夢、死とかかわる。)

最後に、ここでみなさんとはあまりお会いすることがなければよろしいのですが、その願いも叶わないものと諦めなくてはならないのでしょうか、と捨て台詞で終わる。